

七友会だより

題字 大畑 莊 一 氏
昭和63年3月22日発行
岩 手 大 学
人文社会科学部同窓会

第 8 号

弥生、三月に



七友会会長
佐原 和典

私たちは幼ない頃から、

三月は別れの季節だと思っています。三月は卒業の時であり、仕事や住いが変わる時でもあります。小学校からはじまり、大学を終えても、それは仕事を離れるまでの何十年にわたって毎年繰り返される一大イベントになっています。ですから、雪が少し重くなり、三月の声を聞きはじめると、師走以上に心がそわそわしだし、何か胸が詰まるものを感じ寂しくなってきました。三月は私たちを一時、感傷的にさせる不思議な魔力を持っています。とはいえず、人生には別ればかりが存在するのではなく、四月という出会いと希望の時もまたちがいに存在しているのです。

大学という、ある意味では学びとること

主眼をおいた生活の最終段階に別れを告げ、応用と実践に主眼をおく社会に入っていくとき、人がどのような思いを懐いて行くかが、人生に大きな影響を与えるのではないかと私は思うのです。今ほど、劇的な別れと出会いを体験するときはないのでないでしょうか。十人十色の人生であっても、先人たちの生き方には少なからず私たちの指標となるものがあるものです。大いなる時を迎えられた皆さん、すばらしい出会いと希望を得られることを念じております。

この三月は、私にとっても一大転期であって、卒業後懐き続けてきたことが一歩実現できそうです。生来、私は人に使われるのがいやで、会社勤めは初めから考えておりませんでしたから、物を作り出す仕事を始められることは、たいへんうれしく思っています。しかし、多くの人は経済的に不安定なこうした生き方に批判的で、好奇の目でみるものです。しかしながら、私は、私の人生を歩きたいのです。私にしかできないような、私自身が納

得のいく生き方をしてみたいのです。これからの何十年かが、楽しい時ばかりではないはずで、苦しい時をも自分のものにできる、そんな生き方をしてみたいのです。
弥生、三月を迎えると、私はいつも次の一年を考えながら自分勝手な人生哲学を唱えては、去りゆく一年を納得してゆくのです。三月もあとわずかです。新しき出会いの四月が、もうそこまできています。卒業生と同窓生の皆さんに、楽しき一年がまた始まることを願っています。

目次

弥生、三月に……………	1
同窓会報に寄せて……………	2
雑感……………	3
国立大学教官転出の記……………	4
索莫たるかな、わが岩手……………	4
学部あれこれ……………	5
親睦会を思う 他……………	6



同窓会報に寄せて



岩手大学
人文社会科学部部長
高橋 清

同窓会の皆さん、お元気ですか。何人かの卒業生から、仕事が辛い、ストレスがたまると訴えてくる時があります。そのような時に、心から本当に話し合うことができるのは、やはり学生時代の友人ではないでしょうか。これからは、仕事オンリーの時代ではなくなります。企業にとっても、いわゆる「会社人間」は役に立たなくなり、なによりも、人と人とのつながりを大切にする時代が到来するでしょう。となると、同窓会も、役員まかせではなく、皆さん一人一人がより立ててゆく必要があります。

ところで、岩手大学人文社会科学部は、昨年五月二日に学部創設十周年記念式典を盛大に挙行することができました。これは、同窓会からの物心両面にわたる多大の御援助があって始めて実現できたことです。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

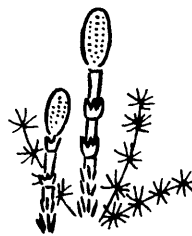
当日は、県知事を始めとする多数の来賓で賑わいました。そのさい、岩手大学合唱団・吹奏楽部の賛助出演によって、本学部学生歌

がさわやかに初公開されたことが印象的でした。人文社会科学部学生歌を聴いた卒業生は殆んどいないと思いますが、三回生の菅原茂君の作詞に本学部の金田諦元教授が曲を付したものです。それは、今若者にブームのマーラー調ともいえるべきかくれた傑作といってもよいでしょう。そのあとホテルでの祝宴には、岩手大学三曲部の余興もあり、琴の音が会場一杯にひびきわたりました。

人文社会科学部の教育目標は、国際化・情報化時代に多角的に対応できるよう、社会文化に対する総合的判断力と専門性をあわせもつ人材を育成することにあります。このような新しい教育理念は、ようやく地域社会にも理解されるようになり、卒業生の地元(岩手県内)就職率は当初の二割台から四割台へと上昇してきております。また、県内への大手企業関連の事務・事業所の進出に伴い、いったん大手に入社した卒業生も盛岡を中心とした県内へ再配置されるケースが増えてきております。

それにしても、かつて啄木が「日本一美しい町」と述べた盛岡も、いまはスパイクタイヤの粉塵でうす汚れています。ハイテク時代といわれる現在、この種の道路環境汚染がなかなか解決されそうもないことにいらだちを感じております。皆さんが四年間学んだ盛岡

の地が、国際的にも誇れる本場に美しい街並みになることを望んでやみません。この三月末で私も任期満了となり、鬼沢新学部長と交替いたします。今後とも、人文社会科学部の充実と発展のために応援されることをお願いいたします。



学部創立十周年 記念式典を終えて

学部創立十周年記念式典は、去る昭和六十二年五月二日、岩手大学体育館において行なわれました。式典には、県知事をはじめとする多数の来賓と大学関係者の参加のもと無事終了いたしました。式典及び祝賀会には、初代会長(現、顧問)の落安昭三氏が出席し、あいさつを行いました。なお、同窓会として、学部二十周年へ向けて準備をはじめましたので、御理解と御協力をお願いします。

原稿の寄稿について

昭和六十三年三月をもって人文社会科学部を退官、あるいは転出される先生方に会報への御寄稿をお願いいたしました。同窓生にとっては、懐かしい名前ばかりで、またひとり、そして、またひとりと、大学から去られることは、まことに寂しいかぎりです。楽しい思い出を共にした先生方の、様々な思いをお読み下さい。

雑感

行動科学研究

佐藤 政雄

三月五日は啓蟄の日である。無論東北特に岩手県は未だ啓蟄とは行かぬ。厳しい寒さが虫の這い出るのを妨げているからである。それこそ今頃虫が外に出ようものならば、直に冷たい外気によって死滅するであろう。しかし、日本全体として見れば、そろそろ春の訪れも聞えて来る頃だ。多少の違和感はあるも、そう否定的に言わなくても良いのではなからうか。啓蟄とは中国の何如の地方の故事に倣った諺であろうか？

啓蟄や虫も凍てつく寒さかな

この頃何となく「対象喪失」ということが実感をもって迫ってくる。「対象喪失」という本が大分前に出された。作者は慶応大学の小此木啓吾氏である。該博な精神分析の知識に基づき一般向けに書かれた本である。以下はこの本を基として自分なりに日頃考えていることの一分を披露しよう。

私はこの春退職する身だから一層痛切に感じられる。先ず健康のこと、脳梗塞を患ってから健康への思いがとみに高まった。しかし、もう健康な体には永久に戻らぬ。脳梗塞に附随していろいろな箇所が痛んで困る。右手は麻痺し、右足はやや良好である。その外に言語障害があるが、ゆっくり話せば分かる。学生には悪しざまに言われたように思う。普通ならそんなに神経質にならないでいいものをつい怒鳴ったりした。学生には大変迷惑をかけた。

退職は役割の喪失・帰属意識の喪失・同僚の喪失・愛情の対象喪失・誇りの喪失・何より貴重な人間関係の喪失、家庭では所得の喪失・生き甲斐の喪失等諸々の事物を喪失することである。いわば定年退職は自分をしかかってくる他律的行為である。暫くの間何も仕事が出来ないものだと思われている。三月になり退職後の心の準備をしている。何もする事が無くなり、何か心を向けうる対象を

模索している自分に気がつく。役割喪失は主要な役割と関連する資源、能力、感情、その他諸々の事物を失うことを意味する。何かに集中出来ない、何を生き甲斐にして生きるか一向に焦点が定まらぬ。友人の喪失（友を失う訳ではない）、話相手の喪失、仕事仲間の喪失、その他有形・無形の喪失等様々な事と物が対象喪失に入る訳だ。これが人生の黄昏という事で何か始めて納得が出来たように感ずる。この辛い途を誰しもが通過しなければならぬ。対象喪失は別の面から見ると新たな対象獲得である。老人の場合、老人クラブに加入し・囲碁の友人を見つめる・短歌俳句の今に入る・墓参・旅行をする等は新たな役割獲得であろう。家庭内の役割では妻から無用物、ゴキブリ亭主、邪魔な存在等々と言われないよう、家庭菜園に精を出したいものだ。最も春から秋にかけてのことだが。私の場合、岩手大学に九年、その前は新潟大学に二十六年も教師生活をしてきたから主要な社会的役割は教師以外にはない。盛岡での教師生活は短かったが岩手大学人杜行動科学科の思い出は尽きることがない。何如か、それは脳梗塞に罹り九死に一生を得た所だからである。



国立大学教官転出の記

地域文化基礎研究

渡辺 洋

二月も押し迫ったある日、同窓会のS君から電話をもらった。「先生、岩手大学をおやめになると聞きましたが、本当ですか。それが事実なら『七友会だより』に一筆書いて下さい」。彼とは十年來の付き合いであり無下に断わることもできず、承諾したものの二月から三月にかけての時期は教師にとって殊の外忙しい。約束の期日を前にして何を書いたらよいか途方にくれてしまった。「盛岡の思い出」では紙幅が足りそうにない。窮余の一策、右記に掲げたような仰々しいテーマとなってしまうが、以下はあくまで私個人の場合であることをお断わりしておく。実は私の辞令は、すでに昨年十一月一日付で文部大臣から発令済である。それには「富山大学教授人文学部へ併任する」と記されている。そしてまもなく「富山大学へ出向させる」という四月一日付の辞令を手にするはずである。「出向」といっても二度と戻ることはないだろう。岩手大学を去ることが決まっただけだから、さまざまな人からいろいろなことを聞かれた。

そのなかで最も多かったのが、「大学の先生にも転勤があるのですか。」というものだった。勤務先が変わるのだから転勤にはちがいないが、民間のそれとは少々違う。昨年五月、学生時代からの畏友H教授が、「先生、いい婿入り先を見つけてきたよ。」と富山大学の公募書類を持参してくれた。定年までは若干間があるものの、決して若くはないので今更他に移ることはないさか抵抗を感じた。しかし助手時代を除けば、岩手大学しか知らず、この大学の居心地のよさをいいことあまりにも長く腰を据えすぎたと常日頃考えていたことも事実であった。「どうせ全国公募、採用されるはずもないだろうが、比較文学教官の公募など滅多にあるものではない。出すだけ出してみよう」。これが転出の発端である。したがって今回の富山行は、ある意味で偶然といえないこともない。ところが私が中学高校時代、富山にいたことを知っている人から、「郷里に錦を飾るわけですね。」などと言われて当惑している。両親とも仙台出身であり、仙台で生まれ、盛岡で二十年暮してきた私は、純粹の東北人である。富山は、かつて住んだことがありこれから住むことになる土地にすぎない。まだ盛岡を離れてもいないのに、いつの日か東北に戻ってきたいと思っているのが偽らざる現在の心境である。そ

れにしても人文社会科学部創設十周年を祝い、この三月には第八回目の卒業生（比較文学専攻生五名）を送り出し、岩手大学を後にすることができるのは本当に幸せだと思う。七友会の会員が、一五〇〇名を越える日も近いだろう。同会の益々の発展を祈念しつつこの駄文のペンを置く。

索莫たるかな、わが岩手

産業経済論

榎本世彦

刻一刻他人の町になりつつある盛岡を、いまはこの寒さやあの街並みまで限りなく愛はしく去り難い思いが一入胸に湧く。

しかし、感傷に浸るには余りにも血気多く、満腔に未だ癒えざる創痕に割り抜かれそうなるゆえ、わが岩手の、わがイーハートープの姿でもデッサンしてみよう。いつか、色付けや仕上げをする日を夢にみて……。

元來、社会科学を志す学徒は、社会的諸現象をどう把握するかにおいて、多くの先学の論理と無縁でありえない。しかし、社会などというものは、現実にはどうあるか誰の目にもみえない。多くの人たちが、個人の営みを各人の好みの画布に作図して、これこそ現実

を最も精巧に描写したと、主張している。しかし、どのような達人伶俐な人といえども、多くの人の生きとし生ける姿を完全に描出すことは、まず、むつかしかろう。

そこに、人間協働の未知なる姿が捉えても捉えてもなお捉えざる個人の行動の様式化として求められ続けるゆえんがあるのである。物的に捉えても、そこに心理的・社会的要素や生物的要素が残る。物的経済的な構造とみると、捉え切れない心理的・社会的な側面が諸問題をつぎつぎに揭示する。

このところにこそ、Barnard が一九三六年三月十日に Princeton University の卒業記念講演で論じた仮構としての組織概念の論理的把握と非論理的把握の重要性があるのである。社会構造や社会システムがますます複雑化し、技術と組織の精緻化が一層求められるとき、具体的個人による部分を知覚することが同時に全体というみえざるものを認知することを必要とするのである。

わが岩手の、白哲岩手の、未来像は一つにこの物的・生物的・心理的・社会的・個人的諸制約の中で、人間協働の在り方をどう捉え、組織動学として経営の諸原理からどう説明しうるかにかかってくる。豊饒なる自然美の岩手は広大な県土にあって、産業集積の利点より、従来分散的配置に重点があった。しかし、

情報などというものは分散化し拡散化する過程よりも、集中化の過程により集合するものである。このとき、情報化社会の中の生きとし生ける人の生活は、個の自律が全体を創造して行く内にこそ築かれるものなのである。上から与えられた個の解放もないし、個別の分立状態の民主的社会もない。

多くの卒業生諸君や同窓会OBの諸君、岩手大学助教榎本世彦に多大の御支援を与えてくれて、本当にありがとうございます。卒業生諸君、ゼミの諸君、困まったら手紙も電話もあるよ。情報化社会なんだから。乞一層の御健闘を。私は岩手の九年間と、諸君達との全てを忘れない。本当にありがとうございます。

脇坂先生について

六十三年三月に退官後、ドイツのミュンヘン大学へ行かれる、独文学の脇坂豊教授にも御寄稿をお願いいたしました。都合により次号に掲載することにいたしました。御期待下さい。



学部あれこれ

昭和六十三年三月をもって退官される先生は、行動科学研究家社会学の佐藤政雄教授と、独文学の脇坂豊教授です。なお、脇坂先生は、新たにドイツのミュンヘン大学で教鞭をとられるとのこと。また、地域文化基礎研究比較文学の渡辺洋教授が富山大学へ、アジア研究国語学の村上雅孝教授が東北大学へ、さらに、産業経済論研究経営学の榎本世彦助教が桃山学院大学へ移られます。様々な思い出がたくさんある先生方ばかりで心残りではありますが、今後の御活躍と御健康をお祈りいたします。

また、先日の選挙により新しい学部長に、行動科学研究実験心理学の鬼沢貞教授が選ばれましたのでお知らせいたします。

計報

人文社会科学部の産業経済論研究の佐藤正教授（農業経済論）が六十二年十月死去されました。心より御冥福をお祈りいたします。

親睦会を思う

同窓会として、何回目かの親睦会を昨年五月三日、盛岡市内のホテルにて開催しました。参加者は一期生から七期生までの約四十名で、大畑先生と深澤先生が顔を出してくれました。要望が多かった盛岡での会ということで、多くの方の参加を期待しておりましたが、最終的には予想(？)したような前記の数に落ち着きました。こうした会ではいつもそうですが、やはり一期生の参加が多いという事です。それだけ、学生時代を懐かしむ年代になったのかと思う反面、後輩たちは、まだ同窓会を必要としないのかな、とも思



うのです。

とはいえ、会はなかなかの盛会で、はじめて会う先輩、後輩が、大学時代のこと、仕事のことなど話に花を咲かせてにぎやかでした。こうした会のお決まりの二次会には、なんと三十名以上がそのまま顔をならべ、わいわい騒ぎながら思い思いに三次会へと流れて、久しぶりの盛岡の街で楽しい一時をすごしました。次回の親睦会は、たぶん同窓会十周年の頃だと思えますが、それまでは各支部や気の合った仲間と心と体の準備をしておいて下さい。次は百人ぐらいで飲みたいものです。

名簿作成の準備中です

同窓会名簿は、昭和六十一年十二月に発行して以来、五年後の六十六年発行を予定しておりましたが、会員の多くの方から「なるべく早く新しい名簿をつくってほしい」との要望があり検討してまいりました。しかし、会の運営があいかわらず順調ではありませんので、早急に発行することができません。そこで、とりあえず会員各位の現住所の確認を行なうこととし、連絡用のハガキを同封しました。前回の作業から二年近くたっておりますので、住所や勤務先等がだいぶ変わっておりますので、新しい住所をなるべく早く

お知らせ下さい。さらに、前回でも連絡先等不明となっている方が相当おりますので、あわせて、情報をお寄せ下さい。期限はありませんが、できれば六月末頃までにお知らせ下さるようお願いいたします。

同窓会の運営について

会の運営は、ここ数年来停滞しており、毎年、評議員会等を開いて会の運営を決めてはおりますが、実際にはごくわずかの人が切り盛りしている状態です。また、三期生以後の参加が少ないため、住所等を十分把握できないなど問題点も多く、かねてから若返りを検討してきました。とはいえ、仕事等に忙しい時期でもあって、なかなか好転しないのであります。そこで、急ではありましたが、二月二十日に卒業予定者との「交流会」を行ない、会との繋がりを考えることを考えました。こうした小さな試みを行ないながら、少しずつでも活動が活発になるよう努力しておりますので、みなさんの御協力もお願いいたします。